

魏晉簡牘のすがた

長沙呉簡を例として

A Form of Wooden and Bamboo Manuscripts in the Wei-Jin (魏晉) Period :
A Case of Chang-Sha Wu-Jian (長沙呉簡)

SEKIO Shiro

關尾史郎

はじめに

本稿は、中国・魏晉時代の簡牘のなかでも、230年代のいわゆる長沙呉簡を取り上げ、その材質や大きさなど形状と、性格・機能との対応関係を探ることを目的としている。この時代に先行する漢代の簡牘については、性格・機能と材質・形状との間に一定の対応関係が存在していたこと、そして簡牘が単なる書写材料以上の意味を有していたことなど、既にすぐれた成果が続出している⁽¹⁾。しかし紙への移行が始まろうとしていた、あるいは始まりつつあった230年代の長沙呉簡には、必ずしもこのような指摘は当てはまらないのではないか、というのが著者がかねてより抱いてきた疑問である。本稿では、同一の性格・機能を有する竹簡と木簡、木牘と竹牘、および木牘と竹簡に注目することにより、このような疑問をいささかなりとも解決したいと思う。

なお長沙呉簡について簡単に説明しておくと、中国・湖南省の省都である長沙市の走馬楼で1996年に見つかった井窖の一つJ22(96CWZJ22)から出土した簡牘群の総称である。年代的には後漢の建安25(220)年から呉の嘉禾6(237)年に及ぶが、230年代のものが圧倒的多数を占める。総数で10万枚以上に上るとも言われているが、その形状は、大木簡・木牘・木簡・竹牘・竹簡・封検・簽牌と実に多様である。名刺や書信のような私文書も若干含まれているが、ほとんどは官文書で、それも当時の長沙郡臨湘侯国(県に相当)に関するものである⁽²⁾。ただし2013年8月の時点で、写真や釈文が公表されているのは4万枚弱で、全部の半数にも満たない⁽³⁾。したがって本稿もなお仮説の域を出るものではないことを初めにお断わりしておきたい⁽⁴⁾。

1 材質・形状と性格・機能概観

本節では、材質・形状と性格・機能との関係について、簡単な概述を行なっておきたい⁽⁵⁾。

長沙呉簡の大半に及ぶ官文書は、さらに狭義の文書と簿籍に大別できる。数量的にこの簿籍の中核を占めているのが各種の名籍簡と後述する賦税納入簡で、一部の例外を除いて竹簡である。このうち後者は、編綴されることにより簿籍を構成することになるが、単独では左右分券式の削である。削とは、幅広の簡ないしは牘に左右同じ文言を記した上で、中程から裁断し、関係する当事者双方

でこれを分有・保管するものを言う。後日の確認のために、左右両片にまたがって入れられた勘合の記号が特徴である。その表題から吏民田家蒭と呼ばれている大木簡も、名称にもあるように左右分券式の蒭である。1枚が長さ50cm前後、幅約5cmの巨大な木簡なので、竹簡のように編綴されたのか、疑問が残るところだが、まとめれば簿籍としての機能を持つことになったはずである。

ところで左右分券式の蒭は、必ずしもこのように簿籍を構成したものばかりではなく、狭義の文書にも見出すことができる。例えば簿籍を発出する際に送り状として附される文書は、発出する側と受納する側との関係により、平行文書だったり上行文書だったりするが、平行文書の場合、この蒭の様式が用いられていた。これに対して上行文書の場合は、略式の上行文書である白が一般的だったようだ。このような簿籍の送り状には一般的に木牘が用いられた。白は略式であるがゆえに、臨湘侯国の県廷で日常的に多用されていたと思われるが、そのせいか、木牘以外に、竹簡のものも見られる。竹簡の白には、戸品出銭簡という、単独では白文書だが、編綴されて簿籍として保管されたと考えられるものもある⁽⁶⁾。

以上、ごく簡単に紹介したが、長沙呉簡に見られる材質・形状と性格・機能の関係はじつに複雑である。大まかな原則はあったようだが、図や表を用いて明快に示すことは容易ではない。以下では賦税納入簡、教文書、そして送り状の白文書を取り上げ、それぞれの形状について考えることにしたい。

2 竹簡と木簡—賦税納入簡—

1) 竹簡

長沙呉簡中の竹簡は数万枚にも及ぶが、その大きさから2種に大別される。一方は、長さ25～29、幅1.2～1.5、厚さ0.15～0.18cm、もう一方は、長さ22.2～23.5、幅0.5～1.2、厚さ0.05～0.1cmである。このうちやや大き目の前者は、戸品出銭簡に代表される上行文書に用いられ、やや小さめの後者は、名籍簡を中心とする簿籍に用いられたようである⁽⁷⁾。

賦税納入簡（以下、「納入簡」と略記）とは、民戸（各級の吏を含む）が米・銭・布・皮革など各種の税物を臨湘侯国所管の倉や庫に納入した際に作成されたもので、左右2行にわたって同じ文言を書き入れた後、中央で裁断して納入先の担当者と納入者側（納入者の本貫である郷担当の勸農掾）に分有・保管された⁽⁸⁾。このうち納入先で保有された1片は冒頭に「入」字が、納入者側で保有されたもう1片には「出」字がそれぞれ記されていた。J22から出土したのは、このうち納入先で保有されていた前者だが、中ほどには左右両片にまたがって「同」字もしくは「同文」の2字を図案化した記号が入っている。上記の大きさは、裁断後のそれである。倉曹が管轄していた米の納入簡と、庫曹が管轄していた布・銭・皮革の納入簡とでは、記載事項のみならず、記載順序にも微妙な違いが認められるが、ここでは、行論の都合上、米の納入簡を例示しておく⁽⁹⁾。なお以下、釈文は原則として、末尾の「録文集・図録一覧」に掲げた『竹簡』以下の録文集に依拠し、勘合の記号をⅡで、別筆を「」でそれぞれ示す。また整理番号については、『竹簡』の巻数を漢数字で、また巻ごとの簡番号をアラビア数字で表記する。

ア入平郷嘉禾二年税米十三斛胄畢Ⅱ嘉禾二年十月廿三日、洽丘李成關邸閣董「基」付三州倉、＝

吏鄭「黑受」.

(壺 7313)

アは嘉禾2(233)年分の税米13斛を、平郷の所属で洽丘に居住する李成(身分を示す用語が冠されていないので、大男すなわち成丁であろう)が、同年10月23日に邸閣郎中の董基を経て三州倉に納入し、吏の鄭黒がこれを受領したことを証明するものである。董基の名、鄭黒の名とこれに続く「受」字は、それぞれの自署である。鄭黒は、三州倉を管理する倉曹の吏だったと考えられる。米は税米・租米・限米といった税種を問わず、このアに見えるように、三州倉に納入されることが多かったが、州中倉に納入されることもあった。この納入先についての規則性は今のところ見出せないが、⁽¹⁰⁾州中倉に納入される場合も、担当の邸閣郎中と倉曹の吏が三州倉とは別人だったことを除けば、同じような納入簡が作成された。イはその1例である。

イ入西郷嘉禾二年税米十一斛 嘉禾三年四月廿三日，下俗丘何黒關邸閣李「嵩」付倉，吏黃＝「諱」・史番「慮」.

(式 2714)

あらためてアとイから、その様式すなわち記載事項と記載順序について整理しておく、以下のようになろう。カッコ内は一部の簡にだけ見られる記載事項である。

「入」字＋納入者の本貫である郷名＋賦課年次＋税種＋税額(＋「胃畢」またはそれに類する表現)＋勘合の記号＋納入年月日＋納入者の居住する丘名＋(納入者の身分)＋納入者の姓名＋「關」字＋「邸閣」＋邸閣郎中の姓名＋「付」字＋(倉の名称)「倉」字＋吏員の職位＋吏員の姓名＋(「受」字)

これらの竹簡の納入簡は、名籍簡と同じように、総計で万単位に達するものと思われるが、じつはこれ以外に木簡の納入簡も出土している。これについては項をあらためて検討する。

2) 木簡(図1)

現時点で紹介されている木簡の納入簡は3枚だけなので、全て掲げておく。以下のウ～オがそれである。⁽¹¹⁾残念ながら大きさに関するデータはない。

ウ 鄧劉喜入二年税米四斛七斗胃畢 嘉禾三年四月七日，付永新倉，吏區荀「受」.

(『三国呉簡』VI24 頁①)

エ 沂沭郷彪呉世入嘉禾二年麻租錢買米十一斛一斗 嘉禾二年十二月廿一日，付郭浦倉，吏「谷＝□受」. 副曹.

(『三国呉簡』VI24 頁④)

オ 沂沭郷監丁□入嘉禾二年帥客米五十斛胃畢 嘉禾二年十一月十八日，付郭浦倉，吏「谷□受」. 副曹.

(『三国呉簡』VI24 頁⑤)

こちらについても、記載事項と記載順序について最初に整理しておく。

納入者の本貫である郷名＋(納入者の身分)＋納入者の姓名＋「入」字＋賦課年次＋税種＋税額(＋「胃畢」)＋勘合の記号＋納入年月日＋「付」字＋倉名＋吏員の職位＋吏員の姓名＋「受」

字（＋「副曹」）

竹簡の納入簡と比較すると、納入者の居住する丘名を欠いていること、「入」字が文中に位置していることなど、いくつか違いは認められるが、中央部分に勘合の記号が記されている点をはじめ、基本的な様式は同じであると言ってよいだろう。また納入簡を編綴して簿籍として保管する際に挿入される集計簡にも、木簡のものがある。

力 ・ 右都郷入税草五枚米合八十三斛八斗五升

（『三国呉簡』VI24 頁③）

キ 集凡二郷襍米合一百卅二斛三斗一升

（『三国呉簡』VI24 頁②）

詳細は省略するが、これらも竹簡の納入簡に附された集計簡⁽¹²⁾と基本的に同じである。なお力に出てくる「草」字は後掲するソのように、吏民田家蒦の表題簡などにも見えているが、「蒦」字の仮借であり、5枚の税米の納入簡すなわち蒦に記された納入額の総計が83斛8斗5升だったことを示している。ただしウ～オにも、この力・キにも、写真からは編綴痕は確認できなかった。

さてそれでは、これら木簡の納入簡の存在をどのように考えればよいのだろうか。編綴痕は確認できないものの、集計簡も揃っているので、編綴した形での保管が想定されていたことは確実である。賦課年次が嘉禾2年、納入年次は同年か翌3年となっており、竹簡のア・イと全く一致する。この地にあつては、竹簡と木簡とが無雑作かつ無原則に混用されていたのであろうか。この問題を解く手がかりは、工とオに見えている沂泛郷という郷名と、やはりこの両枚に見えている郭浦倉、そしてウの永新倉という倉名である。これらは、竹簡の納入簡には全く見えていないものである。

先ず沂泛郷という郷名について。竹簡の納入簡には20以上の郷名が見えているが、その中には沂泛郷という郷名もこれに類似する郷名もない。

また楊振紅氏は、この20以上の郷名には誤記や誤読が含まれているので、実際には、都郷・中郷と東西南北の4郷の他には、平郷・廣成郷・小武陵郷・桑郷・樂郷・模郷の計12郷だけが臨湘侯国の郷だったとする⁽¹³⁾。いずれにせよ沂泛郷が臨湘侯国に所属していたと考えうる余地はなく、他県の郷だったと考えざるをえない。そして郭浦倉という名称の倉も現在までのところ、工とオにしか見られないものである。納入簡に見えているのは、臨湘侯国の県倉である三州倉と州中倉だけだが、



図1 木簡（左から、オ・工・力・キ・ウ）

呉簡全体では、他にもいくつかの倉名が見えている。そしてそれらは、重安倉・劉陽倉・醴陵倉など臨湘侯国以外の県名が附されたものと、(東部) 烝口倉・員(湏)口倉・(醴陵) 澧浦倉など河川をめぐる地形に由来する名称のものとに大別される⁽¹⁴⁾。後者の1つ澧浦倉が、澧水(淶水)と湘水(湘江)との合流地点である澧浦(現在の株洲県淶口鎮附近か)に置かれたものだったことから類推すれば、郭浦倉も郭水なる河川と湘水との合流地点に置かれた倉だったと考えることもできようが、⁽¹⁵⁾具体的には知るべきがない。またウの永新倉については、肆 207 や肆 923 (いずれも表題簡) などにも見えているが、永新なる県名が長沙郡に隣接する盧陵郡の属県として確認できるので、この永新県に關係する倉だったものと思われる。したがって、ウ～オの3枚は臨湘侯国以外の県の納入簡であり、納入簡に竹簡を用いるか木簡を用いるかは、県単位で定められていたと考えれば、問題は氷解する。しかし現実にはそれほど簡単ではない。下のような竹簡が存在するからである。

ク□□二年税白米二斛 〓 嘉禾三年五月十一日，進渚丘月伍劉喜關邸閣李「嵩」付倉，吏黃「諱」＝
・史潘「慮」． (式 701)

郷名部分は欠損しているが、納入者はウと同じ劉喜であり、賦課年次は(嘉禾)2年、納入年次は翌3年である。ここに見えている進渚丘だが、都郷に関わって納入簡の式 778 に出てくるので、⁽¹⁶⁾ウとクの劉喜は同一人物と判断せざるをえない。都郷とは言うまでもなく、臨湘侯国の都郷である。劉喜は嘉禾2年の税米を翌3年4月7日には永新倉に、その約1か月後の5月11日には州中倉にそれぞれ納入し、木簡と竹簡の納入簡(「出」簡)を交付されたことになる。この納入簡は最終的には都郷担当の勸農掾の手に渡ったものと思われるが、いずれにせよ、臨湘侯国内部において竹簡と木簡の納入簡が同時に併存していたことになってしまう。ただ長沙郡臨湘侯国の都郷を本貫とする劉喜が、盧陵郡永新県まで赴いてその県倉に税米を納入したというのはいかにも不自然であり、⁽¹⁷⁾およそ現実的ではない。この問題に対して本稿では、以下に仮説を提示しておく。

長沙郡の首県である臨湘侯国には、郡内各県や長沙郡に隣接する他郡の諸県から、各種の技術者(師佐)とその家族が集められていた。彼らを登載したのが師佐簿という名籍だが、⁽¹⁸⁾県名を冠した前述の倉のうち、劉陽・醴陵・永新の3県からは多くの師佐とその家族が臨湘侯国に移住していたことがこの名籍からわかる。⁽¹⁹⁾永新倉とは、永新県から移住して来た師佐が納入すべき米を貯蔵するために臨湘侯国内に仮設された倉だったのではないだろうか。臨湘侯国の都郷に所属する劉喜は何かの事情により、その永新倉への納入を求められたのであろう。担当の吏である区苟は、永新県で通常行なわれている方法で木簡の納入簡を交付したのではないだろうか。重安倉・烝口倉・澧浦倉、さらには呉昌倉など、諸県の倉の吏が穀物の搬入のため、臨湘侯国に来ていたという伊藤敏雄氏の指摘は、これを傍証するであろう。

これは、臨湘侯国の民戸に他県の納入簡が交付されたケースだが、逆に他県の民戸に臨湘侯国の納入簡が交付されたとおぼしきケースもある。竹簡の納入簡の中には、韶郷(壹 597)・上郷(壹 896, 2485)・圓郷(壹 2877)・堯郷(壹 3988)・尚郷(壹 8274)・幸郷(參 1443)・亭片郷(參 8077)などのものが含まれている。⁽²¹⁾確かにこれらのうちには、楊氏が指摘するように、誤記や誤読によるものが含まれている可能性も否定できないが、臨湘侯国以外の県に所属する民戸が何らかの

事情により、臨湘侯国の倉・庫に諸税を納入したと考えることもできよう。納入先は不明だが、ケのような益陽県の民戸の納入簡（還納簡）も出土している。⁽²²⁾

ケ入益陽縣□民還所貸黃龍三年□ (巻 6528)

これも、益陽県の民戸（姓名は不詳）が本貫のある益陽県ではなく、臨湘侯国の倉に穀物を還納した際に作成されたものであろう。

以上、2項にわたった本節の検討結果を要約すると、以下のようになる。

納入簡には、臨湘侯国では竹簡が用いられた。それは、臨湘侯国以外の県に所属する民戸が何らかの事情により臨湘侯国の倉や庫に納入した場合でも同じであった。しかし全ての県で納入簡に竹簡が用いられていたわけではなく、木簡を用いている県もあった。そのような県の管轄下にあった倉（おそらくは庫も）に、これまた何らかの事情で臨湘侯国に所属する民戸が納入した場合でも、交付されるのは木簡の納入簡であった。

納入簡それ自体は、県レベルで一定の期間保存された後、廃棄されることになっていたと思われるので、それに竹簡を用いるのか木簡を用いるのかの判断は、県の責任で行なわれたということであらう。⁽²³⁾

3 木牘と竹牘—教文書—

長沙呉簡の中には、竹牘も含まれている。大きさに関する正式な報告はないが、写真から判断するところでは、長さは竹簡とほぼ同じながら、3行分の幅をもつものである。ただ竹牘は湾曲している竹を平滑にしたため、縦に断裂する可能性が元来高い。したがって写真から明らかに竹牘と判断できるものはごく少数で、断裂してしまって竹簡と見分けがつかなくなったものもある。本節では、この竹牘について最初に取り上げたい。⁽²⁴⁾

1) 竹牘(図2)

比較的良好な竹牘の例を掲げておく。

コ

君教	丞出給民種糲掾丞「□」如	曹期會掾丞「□」録事掾谷「水」校
		嘉禾三年五月十三日白三州倉領糲米起
主簿	省	嘉禾元年七月一日訖九月卅日一時簿

(貳 257)

サ 「已若」

君教	丞出給民種糲掾丞	如曹期會掾丞	録事掾谷	校
「已若」		□	□三年五月十六日白田	□□
主簿	省	□	□三年四月一日訖五月十五日一時簿	

(肆 1644+1550+1643)

シ□ 省嘉禾三年四月一日訖五月十五日一時簿

(参 1573)



図2 竹牘(コ)

竹牘が縦に断裂する可能性が元来高いことは述べたが、これに加えて上下2段に刻線が入っているため、さらに小さく分裂しかねない。実際にここに掲げた3枚以外にも、竹牘の一部と思しき断片が出土している。⁽²⁵⁾コの場合、上段の刻線は写真から確認できないが、中央から左右に断裂しており、サは左右に加え、左片がさらに上下に分かれて⁽²⁶⁾いる。またシは小さな断片だが、あきらかに右辺に残画が確認できるので、大きな竹牘の一部(コ・サから判断してその左下端)だったことがわかる。以上の理由から解釈は容易ではないのだが、一見すれば明らかなごとく、コ・サには、冒頭に「君教」の2字を有すること、下段中央に「白」とあること、および文末が「一時簿」で結ばれていること、この三つの共通点が指摘できる。また丁寧な書跡で書かれていることも特徴である。これらを手がかりにしながら、性格・機能について検討しよう。

これら竹牘自体が一時簿だったわけではないから、簿籍である一時簿に附された送り状だったというのが先ず最初に浮かぶ可能性だろう。しかし本来の送り状であれば、簿籍の表題となる「一時簿」や「白」は書写面のもっと目立つ位置に大書されてしかるべきだし、「白」の主語も明記されるはずである。にもかかわらずこれらは「一時」に相当する期間や、「白」の年月日などとともに左下に小さく記されているにすぎない。それに対して竹牘の中央に大書されているのは、「君教」の2字で始まる行と、その左側の「主簿」で始まる行(句)である。「君教」とは、臨湘侯相の指示であろうから、⁽²⁸⁾これらは、上行文書の白を承けた下達文書の教ということになる。仲山茂氏や佐藤達郎氏らの成果に⁽²⁹⁾依拠すると、以下のようなプロセスが想定されよう。コの場合は三州倉の、サの場合は州中倉の一時簿が、それぞれ白文書の送り状を附して、おそらくは倉曹掾から県廷に提出される。それを承けて、県廷では期会掾(会計掾か)と録事掾が点校し(校)、その結果を掾(廷掾か)が承認する(如曹)。これを臨湘侯国の丞が認め、さらに主簿が総覧する(省)。最後に臨湘侯相が諾して教が發布されるということである。そしてこの一時簿こそ、還納された「出給民種糧」(民戸に倉から種糧すなわち種籾・食糧兼用として出して支給した穀物)の簿籍だったと考えることができよう。

ところで、このような教文書は、木牘の中にも見出すことができる。次にはこれについて見てみよう。



図3 木牘(左から、ス・セ)

2) 木牘(図3)

ここでは、コ～シと類似した文言を有する例を掲げておく。残念ながら、これらについても、大きさに関するデータを欠いている。

ス

君教 丞出給民種糧如曹期會掾丞「□」録事掾谷「水」校

嘉禾三年五月十三日白庫領品市布

主簿 省起嘉禾元年十二月一日訖卅日一時簿

「已□」

(『三国呉簡』V28 頁⁽³⁰⁾②)

セ

君教 丞「紀」如掾 録事掾潘「琬」典田掾丞「若」校

嘉禾五年三月六日白

主記史梅 「綜」省四年田頃畝收米斛數草

(『三国呉簡』V28 頁①)

スはコやサと文言も書跡もほとんど同じで、上下の刻線とその位置にも違いがない。わずかに違っているのは、廷掾が関与していないことぐらいである。丞に続けてやはり「出給民種糧」の5文字があるが、左下の小字部分には、「庫領品市布」とあり、これが竹牘との最大の相違点である。庫曹掾から県廷に提出された一時簿が、点校・総覧されたのであろう。⁽³¹⁾

一方それに対してセは、録事掾と典田掾が点校し、主記史が総覧している。丞とこの3者の自

署が全て確認できる。ここで点校・総覧の対象となったのは一時簿ではなく、前年の嘉禾4(235)年の「田頃畝收米斛數草」である。これこそ吏民田家簡にはかならない。このことは吏民田家簡の表題簡、とりわけ以下のソと比較すれば明らかであろう。

ソ□□^{ママ}謹嘉禾四年吏民田頃畝收錢布草如牒 (4・4)

嘉禾4年の吏民田家簡は、翌5年の2月20日以降3月20日までの一か月の間に、田戸曹史の校閲を経て左右に裁断されたことが明らかになっているが⁽³²⁾、この一か月間の中でも、3月の3日と10日に集中している。もし3月3日に校閲が行われたのであれば、直ちに当該の郷(担当の勸農掾)により裁断され、その一方がソのような表題簡や送り状の白文書とともに県廷に届けられたと考えられよう。県廷での点校には典田掾の烝若が当たったことがわかるが、彼は嘉禾5年12月の時点で模郷の典田掾だったことが、戸品出錢簡の記述からわかる⁽³³⁾。したがってセは、模郷の勸農掾から届けられた、模郷の吏民田家簡を対象とした点校・総覧に関するものだったということになる。

以上、本節では2項にわたり、「君教」の2字を冒頭に掲げた教文書の竹牘と木牘について見てきた。竹牘は、倉曹(掾)から提出された一時簿に関連して用いられたようだが、同じ一時簿でも庫曹(掾)から提出されたものに関連しては木牘が用いられている。木牘の教文書の方が数的には竹牘のそれを上回るが、竹牘と木牘の決定的な違いないしは使い分けの原則といったようなものは、残念ながら⁽³⁴⁾説明できない。そもそも教文書自体の性格・機能についても、詳細は今後⁽³⁵⁾に委ねざるをえないというのが現状である。

4 木牘と竹簡—白文書—

第1節に述べたように、長沙呉簡の中には、略式の上行文書である白が数多く含まれている。戸品出錢簡のように、単独では白文書だが県廷で編綴されて簿籍となるような竹簡もあったが、各種の簿籍が送達される際に送り状として附される木牘の白文書もあった。ここでは後者すなわち送り状の白文書について考えてみたい。

1) 木牘(図4)

送り状である木牘の白文書の具体例には事欠かないが、紙幅の都合もあるので、ここには行論に直接関わる1枚だけを、試訳とともに掲げておく。これも大きさは不詳である。

夕都郷勸農掾郭宋邛頭死罪白；被曹勅，條列郷界方遠□居民，占上戸籍
分別言。案文書，輒部歲伍五京園□毛常等隱核所部。今京關言，州吏姚達
誠裕大男趙式等三戸口食十三人□在部界。謹列人名口食年紀各別爲簿，如牒。謹
列言。宋誠惶誠恐邛頭死罪死罪。

詔 戸 曹

(後 缺)

(肆 4523 (1))

都郷勸農掾の郭宋が畏まり申し上げます。(戸)曹から受けた命令では、郷内の、中心から離れた土地に居住している民戸を簡条書きにし、戸籍に登録して分別して言上せよ、ということでした。そこで文書を調べ、歳伍の五京・圃□・毛常らを分遣して、それぞれの担当区域について(漏れや過ちを)正させました。今、京が申すには、州吏の姚達と誠裕、大男の趙式ら3戸計13人が域内で見つかりました。謹んで人名・口数・年齢を列記して各々「簿」を作り、別添した通りです。謹んで言上致します。宋がお恐れながら畏まりつつ。

戸曹に^{いた}言上

臨湘侯国の戸曹(掾)から、都郷担当の勸農掾郭宋に対して、漏戸・逃戸の検括が指示され、それを承けた宋が歳伍を分遣して調査させた結果、3戸13人が検括され、その「簿」が作成されて戸曹⁽³⁶⁾に届けられた。本木牘自体は、3戸13人のデータを内容とした「簿」に附された送り状であって、その形式は上行文書の白である。最後の「詣戸曹」の3字の左側半分が不自然な形で欠損しているが、他の白文書から、次行に「某月某日白」とあったことが確実である。また上下2か所に編綴痕が鮮やかに残っている。当初から編綴箇所を半文字分ほど空けて文字が書写されていることも写真から確認できる。

この郭宋は、嘉禾4(235)年8月の左右分券式の木牘(『湖南省展』95頁61-2)に、都郷勸農掾として名前のある廓宋であろうから、このタもその前後のものと判断される。

ところで、このような検括が都郷だけに指示されたとは考えがたい。臨湘侯国の中心に位置していた都郷でさえ検括の対象になったとすれば、他の郷にも同じような指示が出されたと考えるべきであろう。残念ながら、現在まで同じような内容を有する木牘は確認できていない。しかし、これと同じような文言を有する竹簡が複数枚出土している。次にはこの竹簡について見てみよう。



図4 木牘(タ)

2) 竹簡(図5)

最初に該当の簡を一括して掲げておく。またタの一致する箇所を[]に入れて下に併記しておく。⁽³⁷⁾
また姓名には下線を附した。

チ□□白□曹勅? 條列所部方遠^授居民姓名上 (肆 4435)

[白被曹勅條列郷界方遠□居民占上]

ツ□□牒列郷界方遠聚居民占上戸□□別□ (肆 4474)

[條列郷界方遠□居民占上戸籍分別]

テ□所部□□關言州吏董基胡仲牒□□ (肆 4473)

[所部 今京關言州吏姚達誠裕]

ト□□輒部歳伍巨加李非蔡金等隱核所部今加非□ (肆 5331)

[輒部歳伍五京□毛常等隱核所部今京關言]

ナ□□詣戸曹 (肆 4424)

[詣戸曹]

以上、チ～ナの5枚のうち、ツとテの2枚は番号が隣接しているだけではなく、濃いめの太い墨と横長のしっかりした書跡が一致するので、元来は同じ文書だったと考えられるものである。

ところで、これらのうちトの肆 5331を除く他の簡は、Ic3③(肆 4419～4504)とIc3④(肆 4505～4523(1)=夕)という二つの群(坨)を構成しており、同時に一括して廃棄された可能性が高いものである。このことは、県廷の同じ部署で保管されていた可能性をも想起させるが、実際にこれら以外にもこの二つの群には、「戸籍」というタームや夕と類似した語句を記した簡が少なくない。⁽³⁸⁾

さてあらためて夕とチ以下の5枚を比較してみると、姓名以外の部分は表現がきわめて類似していることがわかっていく。また姓名がいずれも異なっているので、チ以下が、夕の下書きや控えといった解釈は成立しない。同じように、夕が送り状として宛先である戸曹に届けられたのに対し、チ以下は下書きや控えとして発出側の郷(担当の勸農掾)に残されたものという仮説も、右に述べたような出土状況を尊重する限り、無意味であろう。つまり、チ以下は、都郷以外の郷が、検括の結果を「簿」として戸曹に報告した際、それに附された送り状だった可能性が高いということである。前節のように、元来竹牘だったのが断裂して竹簡のようになってしまったのではないか、という指摘もありえよう。それに対しては、竹牘であった可能性を完全に否定はできないが、かと言って、その可能性を積極的に認めるだけの根拠もない。ただ夕とは異なり、編綴痕が文字の上にかかっているので、制作の手順も異なっていたのであろう。

以上、本節では、各郷から臨湘侯国の戸曹に提出された検括結果を記した「簿」に附された送り状、白には木牘だけではなく、編綴された竹簡も用いられた可能性を指摘した。木牘を用いるか竹簡を用いるかは、郷(正確には郷担当の勸農掾)の判断に依拠したということだろう。



図5 竹簡(左から、チ・ツ・テ・ト・ナ)

おわりに

以上、本稿では3節にわたり、長沙呉簡においては、竹簡と木簡、竹牘と木牘、木牘と竹簡が、それぞれ同じ性格・機能を有する簿籍や文書に併行して用いられていたことを見てきた。いずれも県廷内部でのことなので、木や竹の資源さえ確保できれば、厳格な規定など必要なかったのかもしれない。そうだとすれば、本稿で見てきたこともある意味では至極当然で、格別な発見と言うほどのことはなくなる。

ところで、本稿では白を略式の上行文書と捉えてきた。通常、末尾に記される時間（白が行なわれる時間）の表記に年を欠き、月日だけなのがその主たる根拠だが、これに対して、漢代以来の上行文書の様式である「敢言之」の3文字を多用する竹簡も何枚か出土している。こちらは冒頭に時間を年から書き起こしており、白とは明らかに使い分けがなされていたことがわかる。その中には、主簿の羊君（肆1267）や三州倉の吏である鄭黒（肆1482）などが発出したり、宛先が白と同じように「詣戸曹」（式7049）となっていたりするものも含まれているが、多くは以下のように、臨湘侯相とその丞や、中部督郵掾などが発出している。

二 𠄎 禾元年九月乙丑朔廿日甲戌，臨湘侯相靖・丞祁叩頭死罪敢言 𠄎 （𠄎 4396 正）
𠄎 掾 石 彭 （𠄎 4396 背）
又嘉禾元年五月丙寅朔日，兼中部督郵書掾傅汎叩頭死罪敢言之 （𠄎 4363）

これらは、臨湘侯国よりも上位の単位すなわち長沙郡に向けて発出された上行文書ということになるが、いずれも戸品出銭簡と同様、幅広の竹簡が用いられているほか、力強く明瞭な書跡が特徴的である。その一方で、木牘・木簡・竹牘はもとより、名籍簡のような幅の狭い竹簡にさえ、「敢言之」文書を見出すことはできない。同じ上行文書であっても、もっぱら臨湘侯国の内部で通用したと思われる白文書とは明確に区別される存在であった。このことを最後に指摘して本稿を閉じることにする。⁽⁴¹⁾

註

(1)——このような漢代の簡牘の特質全般については、富谷至『木簡・竹簡の語る中国古代—書記の文化史—』、岩波書店・世界歴史叢書、2003年、同『文書行政の漢帝国—木簡・竹簡の時代—』、名古屋大学出版会、2010年が、また個別の問題については、初山明「刻齒簡牘初探—漢簡形態論のために—」、『木簡研究』第17号、1995年、角谷常子「簡牘の形状における意味」、富谷至編『辺境出土木簡の研究』、朋友書店・京都大学人文科学研究所研究報告、2003年、および高村武幸「中国古代簡牘分類試論」、『木簡研究』第34号、2012年などがある。

(2)——長沙呉簡の概要については、長沙市文物工作隊・長沙市文物考古研究所「長沙走馬樓 J22 発掘簡報」、『文物』1999年第5期（「長沙走馬樓二十二号井戸発掘報告」と改題し、『吏民田家翦』上冊、所収）、参照。

なお従来、幅広の簡を「牘」と呼んでいたが、「牘」には本来そのような意味はなかったという指摘が、角谷常子「里耶秦簡における単独簡について」、『奈良史学』第30号、2013年や、高村武幸「秦漢時代の牘について」、『人文論叢』第30号、2013年などにおいて相次いでなされている。本稿はこのような成果を軽視するつもりはないが、便宜上、従来通り幅広の簡を牘と呼んでおく。

(3)——2013年12月現在、走馬楼簡牘整理組編の図録本は5冊が既刊だが、そこに写真と釈文が収録されているのは合計45808枚(『吏民田家煎』2141枚、『竹簡』壹10545枚、『竹簡』貳9091枚、『竹簡』參8413枚、『竹簡』肆5618枚)で、これに前註に掲げた発掘簡報や、『三国呉簡』・『湖湘簡牘』などの各種図録に紹介されたもの若干枚が加わる。

(4)——本稿は、平成16-18年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「長沙走馬楼出土呉簡に関する比較史料学的研究とそのデータベース化」(研究代表者:關尾/課題番号16320096)、ならびに平成20-23年度科学研究費補助金・基盤研究(A)「出土資料群のデータベース化とそれを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」(研究代表者:關尾/課題番号20242019)により作成したデータベースに多くを依拠している。伊藤敏雄氏以下、作成を担当された両プロジェクトのメンバーをはじめとする関係各位に謝意を表したい。

(5)——本節で述べる煎については、關尾「破煎・別煎考—長沙呉簡を例として—」,藤田勝久編『東アジアの資料学と情報伝達』,汲古書院,2013年を、また白文書については、同「『呉嘉禾六(二三七)年四月都市史唐玉白收送中外估具錢事』試釈」,『東洋学報』第95巻第1号,2013年,伊藤敏雄「長沙呉簡中の生口売買と「估錢」徴収をめぐる—「白」文書木牘の一例として—」,『歴史研究』第50号,2013年などを参照されたい。

(6)——戸品出錢簡の詳細については、安部聡一郎「走馬楼呉簡中所見「戸品出錢」簡の基礎的考察」,藤田勝久・松原弘宣編『東アジア出土資料と情報伝達』,汲古書院,2011年,参照。

(7)——竹簡の大きさについては、長沙市文物工作隊他,前掲「長沙走馬楼J22発掘簡報」によるが、本文に掲げたようにはっきりと2種に分けることできるわけではないようで、納入簡の場合、長さは戸品出錢簡に匹敵するが、幅は戸品出錢簡と名籍簡の中間、といったところである。

(8)——その概要については、關尾「『最後の簡牘群』考—長沙呉簡を例として—」,『資料学の方法を探る—情報発信と受容の視点から—』第11集,2012年,参照。

なお「賦税納入簡」(納入簡)という概念は、賦税の納入時に作成され、その納入が完了したことを証明する際に根拠となる簡という程度の意味で用いる。

(9)——米の納入簡の様式については、伊藤敏雄「長沙呉簡中の邸閣・倉吏とその関係」,『歴史研究』第49号,2012年を参照されたい。なお米の納入簡も含め、納入

簡がどのようにして作成されたのか、その作成主体とプロセスについては、勘合の記号の形状や書風などを手がかりとして検討を深化させる必要がある。本稿もそのための一つの試みである。

(10)——おおよその傾向として、平郷・広成郷・小武陵郷・東郷・桑郷・樂郷の納入先が三州倉、都郷・模郷が州中倉、西郷・中郷が両方の倉と言えそうだが、例外も少なくない。なお谷口建速「長沙走馬楼呉簡にみえる孫呉政権の地方財政」,長沙呉簡研究会例会(2012年9月14日)配布資料によると、州中倉は臨湘侯国の倉(県倉)と沙郡の倉(郡倉)という二面性を有していた。

(11)——本項の記述は、關尾「『湖南長沙三国呉簡』の賦税納入木簡について」,『長沙呉簡研究報告』2010年度特刊,2011年によっているが、安部聡一郎氏の教示を得て一部前稿を修正した。

また以下、木簡の納入簡とその集計簡については、写真と釈文が、『三国呉簡』VI24頁以下に「三国 呉・入付倉吏襍米簿」というタイトルのもとに掲載されているが、釈文には誤りが目立つ。本稿では、窪添慶文氏や安部聡一郎氏の教示を得てこれを修正した釈文を掲げた。

(12)——竹簡の納入簡に附された集計簡については、關尾「出土状況よりみた長沙呉簡—『長沙走馬楼三国呉簡竹簡』[肆]所収の賦税納入簡を中心として—」,『中国出土資料研究』第17号,2013年,参照。

(13)——楊振紅「長沙呉簡所見臨湘侯国属郷の数量与名称」,卜憲群・楊振紅主編『簡帛研究』2010,広西師範大学出版社,2012年。

(14)——谷口,前掲「長沙走馬楼呉簡にみえる孫呉政権の地方財政」。なお重安・瀏陽・醴陵の3県はそれぞれ、湖南省衡陽県・瀏陽県東北・醴陵市に比定できる。後掲の永新県とは異なり、いずれも長沙郡の属県で、かつ湘江水系の流域である。

(15)——伊藤敏雄「長沙呉簡中の朱痕・朱筆・「中」字について(その2)—2011年3月の調査結果をもとに—」,『長沙呉簡研究報告』2010年度特刊,2011年,参照。なお伊藤氏は、漣浦倉をはじめ烝口倉・重安倉・呉昌倉など、臨湘侯国以外の倉吏が穀物の搬入のため、臨湘侯国に来ていたことを指摘している。

(16)——当該の納入簡を示しておく。

入都郷嘉禾二年佃帥限米廿斛 嘉禾三年二月廿九=日,進渚丘男子周角關邸閣李「嵩」付倉,吏黃「諱」・史潘「慮」受。

(17)——盧陵郡永新県は揚州に属し、江西省永新県西方に比定される(『説史方輿紀要』巻87江西5吉安府)。

長沙郡を統轄していた荊州に隣接していたとは言え、長沙郡の首県である臨湘とは、直線距離にして170kmも離れている。また贛江の支流禾水流域を領域にしている、水系も異なっており、湘江流域とは、羅霄山脈により隔てられている。

(18)——師佐簿については、成果が多出しているが、さしあたり關尾「長沙呉簡中の名籍について・補論—内訳簡の問題を中心として—」、『人文科学研究』第119輯、2006年、凌文超「走馬樓呉簡両套作部工師簿比対復原整理与研究」、卜憲群・楊振紅主編『簡帛研究』2009、広西師範大学出版社、2011年などを参照のこと。

(19)——前註に挙げた拙稿でもふれたが、師佐の本貫は劉陽・醴陵兩県をはじめ、ほぼ長沙郡内におさまる。そのなかで、郡外の永新県は珍しい例だが、ここから移住した師佐のほとんどは製鉄に関する技術者だった(關尾、前掲「『湖南長沙三国呉簡』の賦税納入木簡について」、参照)。現在でも永新県西方の山間部では鉄鉱石が産出されるようなので(『江西省地図集』、中国地図出版社、2008年、28頁)、特別なケースだったのであろう。

(20)——伊藤、前掲「長沙呉簡中の朱痕・朱筆・「中」字について(その2)」、参照。

(21)——本文に掲げた以外にも、小西郷(壺123、参1204→西郷)・小模郷(壺1615→模郷)・小楽郷(式8488→楽郷)など、臨湘侯国の郷に所縁のある郷名や、疑問符が附された郷名がいくつかある。

(22)——厳密に言えば、ケは諸税の納入簡ではなく、官から貸与されていた食用穀物を還納した際に作成された還納簡であるが、その様式や機能は通常の納入簡に準じるものであった。この点に関してはさしあたり、關尾「穀物の貸与と還納をめぐる文書行政システム一斑—東アジア古文学の起点としての長沙呉簡—」、角谷常子編『東アジア木簡学のために』、汲古書院、2014年、参照。なお益陽県は、湖南省益陽市に比定される。

(23)——なお南京でも250年代の納入簡が出土しているが、これも木簡である。關尾「南京出土の名刺簡について—「魏晉「名刺簡」ノート」補遺—」、『資料学研究』第7号、2010年、参照。

なお本文では、ウの解釈に重点をおいたため、エ・オについては詳述できなかった。この2枚は、郷名・倉名も類例がないが、臨湘侯国に來た他県の倉の吏が、何らかの事情があつて持参したものというところだろうか。

(24)——本節は、關尾、前掲「穀物の貸与と還納をめぐる文書行政システム一斑」を踏まえているが、君教牘の理解については、これや、關尾、前掲「『呉嘉禾六(二三七)

年四月都市史唐玉白收送中外估具錢事」試釈」などにおける所見を一部あらためた。また伊藤敏雄「長沙呉簡中の牘について—2013年3月末段階での集成及び検討—」、長沙呉簡研究会例会(2013年6月1日)配布資料からは大きな裨益を受けた。

(25)——コ〜シ以外の断片について、整理番号だけ掲げておく。

式658, 882, 5536, 6921+6871, 参2056, 5600。

(26)——サは別筆を含めて全4行だが、右半分は肆1644、左半分の上部は1550、同下部が1643である。なお1550の下端は下の刻線に沿っているようだが、1643の上端は刻線とは一致しておらず、中間に小さな断片があったものと思われる。

(27)——「一時簿」とは、「四時簿」に対する概念であろう。四時=四季に対して、一時=一季を指すが、必ずしも3か月と期間が固定されていたわけではなかったようである。また王素「長沙呉簡中の「月旦簿」と「四時簿」」、『文物』2010年第2期、参照。

(28)——谷口建速「長沙走馬樓呉簡にみえる「貸米」と「種粮」—孫呉政権初期における穀物貸与—」、『史観』第162冊、2010年は、君を「府君」、すなわち太守(この場合は長沙太守か)と解釈するが、君は広く上位者に対する敬称として用いられたはずだから、このように限定的に解釈する必要はなかろう。むしろこのように解釈すると文書全体の意味や文書の流れが捕捉できなくなるのではない。

(29)——仲山茂「漢代における長吏と属吏のあいだ」、『日本秦漢史学会会報』第3号、2002年、佐藤達郎「魏晉南北朝時代における地方長官の発令「教」について」、富谷至編『東アジアにおける儀礼と刑罰』(平成18-22年度科学研究費補助金・基盤研究(S)「東アジアにおける儀礼と刑罰」研究成果報告書)、京都大学人文科学研究所、2011年、参照。

(30)——『三国呉簡』のタイトルは、ス・セ合わせて「三国呉・校布、米数書」となっている。

(31)——言うまでもなく、庫に貯蔵されていたのは布の他に銭や皮革であつて、穀物ではない。にもかかわらず、スに「出給民種糧」の5文字が入っている理由については、關尾、前掲「穀物の貸与と還納をめぐる文書行政システム一斑」で推測してみたが、結局不明と言うほかない。

(32)——關尾「長沙呉簡所見「丘」をめぐる諸問題」、『嘉禾史民田家翦研究—長沙呉簡研究報告・第1集—』、2001年、参照。

(33)——安部、前掲「走馬樓呉簡中所見「戸品出銭」簡の基礎的考察」、参照。

(34)——なお、刻線はないが3段の中ほどに「主記史譚「超」省」と書かれた木簡がある（『三国呉簡』V6頁①）。タイトルには「官文書」とだけしかないが、これも同類の文書だった可能性がある。

(35)——これらの牘には刻線はあるものの、編綴痕はないので、簿籍などに括り付けて移動した可能性は先ずない。県廷における業務記録のようなものだったのだろうか。また刻線の意味も不明である。

佐藤、前掲「魏晉南北朝時代における地方長官の発令「教」について」は、魏の教には漢代と同じように教戒的な色彩があったことを指摘している。ただし文書行政システムの中に組み込まれた教は上行文書の白に対応しており、略式（の下達文書）という点で白と共通する側面を有していたことは否定できないだろう。

(36)——このタは、「戸籍」と「人名口食年紀（簿）」という2つのタームが同時に出てくる貴重な史料である。今まで、長沙呉簡では「人名口食年紀簿」こそ戸籍にほかならないという理解が定着しつつあったが、そのような理解の妥当性を再検討する必要性が生じたわけで、今後の検討が俟たれる。

(37)——竹簡の釈文は写真によりあらためた簡所があるが、註記は省略した。

(38)——その1つ肆4482には、「戸籍」というタームがあるほか、某忠なる人物が文書の作成にあたったように記されている。おそらくは嘉禾2（233）年の貸与簡に平郷担当の勸農掾として名が見えている蔡忠であろう。

ちなみに当時郭宋は主簿として名が見えている。

なお年代に関しては、テに「州吏董基」とあるのが注目される。アに邸閣郎中として自署している董基その人である。彼が三州倉担当の邸閣郎中として納入簡に現れるのは嘉禾2（233）年初頭からである。その職名から判断して、中央官だったと思われるが、ここには「州吏」とあって、少なくとも郡・県より上位の単位から派遣されてきたことは確実である。しかし彼は臨湘侯国に着任後もちゃんと附籍されていなかったかのごとくである。

(39)——そうした中であって、唯一戸品出銭簡だけは、典田掾から臨湘侯相に上呈されるためか、年が必ず明記されている。

(40)——壹4365は釈読が困難だが、中部督郵掾と臨湘侯相が連名で発出した上行文書である。

(41)——なお「敢言之」文書に以下のようなものがある（小字は右附き）。

嘉禾二年十二月壬辰朔_卅日_辛 臨湘侯相君丞 叩 =
□頭死罪敢言之 (肆1476)

嘉禾四年八月丁未朔 日臨湘侯相君丞敢言之
(肆3568)

□□月_四日□□臨湘侯相君丞叩頭 死罪敢言之□
(肆5442)

本文に二として掲げた壹4396は嘉禾元（232）年9月のもので、臨湘侯相は某靖だが、この3枚では某君になっており、翌嘉禾2年には遅くとも交替があったことがわかる。そして、某君のもとでは、最初に日付を空欄にしておき、最後に日付とその干支を本文右側に小字で書き込むことが行なわれていたことがわかる。

出典一覧

図1 木簡：『三国呉簡』VI、24頁。

図2 竹牘：『竹簡』式、上冊31頁。

図3 木牘：『三国呉簡』V、28頁。

図4 木牘：『竹簡』肆、中冊503頁。

図5 竹簡：『竹簡』肆、中冊491頁（チ）、496頁（ツ・テ）、599頁（ト）、490頁（ナ）。

録文集・図録一覧

『吏民田家勘』：長沙市文物考古研究所・中国文物研究所・北京大学歴史学系走馬樓簡牘整理組編『長沙走馬樓三国呉簡 嘉禾吏民田家勘』全2冊、文物出版社、1999年。

『竹簡』壹：長沙市文物考古研究所・中国文物研究所・北京大学歴史学系走馬樓簡牘整理組編『長沙走馬樓三国呉簡 竹簡』[壹]全3冊、文物出版社、2003年。

『竹簡』式：長沙簡牘博物館・中国文物研究所・北京大学歴史学系走馬樓簡牘整理組編『長沙走馬樓三国呉簡 竹簡』[式]全3冊、文物出版社、2007年。

『竹簡』参：長沙簡牘博物館・中国文物研究所・北京大学歴史学系走馬樓簡牘整理組編『長沙走馬樓三国呉簡 竹簡』[参]

全3冊，文物出版社，2008年。

『竹簡』肆：長沙簡牘博物館・中国文化遺産研究院・北京大学歴史学系走馬楼簡牘整理組編『長沙走馬楼三国呉簡 竹簡』[肆] 全3冊，文物出版社，2011年。

『湖南省展』：西林昭一監修『湖南省出土古代文物展 古代中国の文字と至宝』，毎日新聞社・(財)毎日書道会，2004年。

『三国呉簡』：宋少華主編『湖南長沙三国呉簡』全6冊，重慶出版社，2010年。

『湖湘簡牘』：張春龍・宋少華・鄭曙斌主編『湖湘簡牘書法選集』，湖南美術出版社，2012年。

(新潟大学人文社会・教育科学系(人文学部)，国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2014年1月7日受付，2014年5月26日審査終了)